
ある笛使いの旅 短編集（仮）

aqwin

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある笛使いの旅 短編集（仮）

【Nコード】

N2419J

【作者名】

aqwin

【あらすじ】

「ある笛使いの旅」の短編集。

本編の進行とはそれほど関係ありません。

お正月といえば……

「えー！？」

シーファの声が辺りに響き渡る。

それを聞いて何事かと思い、シードが駆けつけてきた。

「一体どうしたんだ？」

「お兄ちゃん、大変よ……！」

「……えっ？」

シーファは（いつものように）カルムを抱っこしていた。

しかしその表情はいつになく真剣で、じっとシードを見つめている。

これは只事じゃない——シードはそう読み取り、同じく真剣な表情になる。

その場にしばらく間が生まれる。風が一吹き吹いていった後にシーファは口を開いた。

「カルムが”お正月”を知らないんだって！」

「……え？」

その一言で、シードの動作、思考両方の時が止まった。

「これは一大事よ！　ねえお兄ちゃん、どうしよう！」

「ちょ、ちょっと待ってくれ。全然話が見えてこない……」

事の始まりは、カルムとシーファの短い会話。

『そういえば今日はお正月ね。カルムの願い事は何？』

『え、”おしよがつ”って何？』

「……と、こついう事なのよ！」

「……はあ」

興奮しているシーファの言葉を聞いて、シードはそう呟くしかなかった。

そして、シーファの腕の中のカルムに近づき、言った。

「カルムは本当にお正月を知らないのかい？」

「うん……そんな言葉初めて聞いたよ」

カルムは少し困ったような顔をして答える。

（笛使いだから……かな？）

シードは頭の中で仮説を立てる。しかし何の根拠もないのですぐに

崩した。

そしてシーファが再び喋り出した。

「ね！ だから今からお正月をやろう！」

「……は？」

再び時が止まる。

「”お正月をやる”ってどついつ言葉だよ……。それにいきなりな
んでまた？」

「だって、あんなに楽しい行事を一度もやったことがないなんて可
哀相じゃない！」

シードはさらに口を挟もうとする。

しかしそれより先にカルムが口を開いた。

「シーファ、おしょうがつって楽しいの？」

「そりゃー楽しいわよ！ 絶対やみつきになるよ」

「それなら僕もやってみたい！」

カルムは片手をピシッと挙げ、シードを見つめる。

その好奇心に満ちた純粋な眼差しに、シードは思わずたじろいでし
まう。

その時シーファは勝ち誇ったような顔を浮かべていた。

「……しかしお正月をやると言ったって何をやるんだい？ 初日の出はもうとっくに過ぎちゃったし」

「それはもちろん！——」

シーファは指を左右に振って、ウインクをした。

「お餅を食べるのよ！」

また食べ物か——というツツコミはあえてしないでおいた。

「しかし餅なんてそうそう手に入るもんじゃないだろう？」

「だからちゃんとお餅を作るの！」

「それじゃあもち米はどうするんだ？」

シードがそう言うと、シーファはうつむいて黙り込んでしまった。どうやらそこまで考えていなかったらしい。

と、そこへ二人のポケモンがやってきた。

「あれ？ みんな久しぶりだね」

「マ、マッスグマ！？ 何で君が……」

「いやーこの前はありがとう。すっかり足治ったよ」

ほがらかに笑いながら、マッスグマはそう返す。

シードの言葉の無視が故意かどうかは定かではない。

見ると、マッスグマとジグザグマは重そうに何かを抱えている。不思議に思っ、カルムはマッスグマに尋ねた。

「……何を持ってるんですか？」

「もち米だよ。実はくじに当たって貰い過ぎちゃって……。そうだが、良かったら少し貰ってくれない？」

「本当！？ ありがとう！」

そう言っ、マッスグマは地面にもち米を置く。

ドスンという音がして地面が揺れたが、特に気にしている様子は無かった。

「それじゃまたね！」

「さようなら！」

「じゃあね！」

振り返りながら笑顔で手を振るマッスグマに対して、シーファとカルムも手を振って別れを告げた。

カルムは地面に置かれたもち米（袋）を物珍しそうに観察していた。姿が見えなくなったところで、シーファは再び勝ち誇るようにシードを見た。

「さあ、もち米は揃ったわよ！」

(何だこのトントン拍子は!?)

わけのわからない勢いに押され、思わずたじろぐ。
しかし何とか持ち直して、シードは言った。

「でも、臼うすと杵きねがなきゃ餅は作れないんじゃないか？」

「むづ……!」

頬を膨らませて、悔しそうな顔をするシーファ。
そこへカルムが口を挟んだ。

「うすときねって何？」

それを聞いて、シーファは地面に目を向ける。

「えつとねー。二つとも木でできてね。こーんな形をしてて……」

シーファは地面に指で形を描いていく。
カルムはそれをしばらくじっと見つめた後、近くにあった木へと向かう。

そしておもむろに笛を吹き始めた。

【はっぱカッター】

葉の鋭い刃によって、木は切り落とされる。

【マジカルリーフ】

オーラを纏った葉が自在に操られ、その形を整えていく。

数分も経たない内にその作業は終わり、笛を吹き終わったカルムは後ろに振り返った。

「これでいい？」

「すごい！ ばっちりできてるよ」

シーファに頭を撫でられると、カルムは照れ隠しに頬を掻いた。そして二人は同時にシードの方を向いて、想いを込めた眼差しで見つめる。

これにはさすがに参ったのか……

「分かったよ。やろうか」

そう言つて、シードは軽い笑みを浮かべた。

「それじゃ、いくぞー」

「オッケー」

もち米をセットして、準備完了（細かい部分は省略）

シードは杵を構え、シーファは反対側から両手を突き出す。カルムは横からその様子をワクワクしながら見守っていた。

交互に掛け声を言い合って、テンポを作っていく。

「直接手を入れたら危ない」と言われて、シーファは念力でもち米を返していった。

しかし、しばらく経つと……

（やってみたい……）

カルムはうずうずしていた。

そんな様子を察知してか、二人は作業を止めてカルムを見た。

「一緒にやる？ カルム」

「！ いいの？」

カルムの表情はみるみる晴れやかになっていく。
しかし反対にシードは心配そうな顔をしていた。

（大丈夫なのか……？）

そう思いながらも、杵を手渡そうとする。が、カルムは首を振って言った。

「そこに置いておいて大丈夫だよ」

「え？」

どういう意味かさっぱり分からないが、とりあえず地面にそれを置いた。

するとカルムは再び笛を吹き始める。

【つるのムチ】

草むらから生えたつるを操って、杵を握る。

そしてシーファとアイコンタクトを取って、それは始まった。

ドン！グイ！ドン！バン！ドン！ベタ！ドン！グチャ！

カルムは笛の音で、シーファは念力でそれぞれ巧みに操り、超ハイスピードで進むそれは、もはや”ぺったん”というレベルではなかった。

その傍らで、シードは今まで見たことのない斬新な餅つきを目の当たりにしていた。

その表情は、想像にお任せする。

……数分後、すっかり膨らんで立派な餅となっていた。

「やつぱりおいしー♪」

「よくあれでちゃんとできたなあ……」

二人が話している中、カルムはまたもや好奇心に満ちた目で餅を見つめていた。

そして息を吹きかけて熱を冷ましながら、そつと口に咥えた。

「の、^{伸びる}のひる！ ^{伸びる}のひる！」

そんな様子を、兄妹は笑いながら見ていた。

……すっかり食べ終わった頃。

「そうそう、お正月には神様にお願い事をするんだよ」

「そうなの？」

カルムの反応に、シードは頷いて返した。

「それじゃあ、今からみんなでお願い事しよう」

シーフアはそう言うてから、両手を合わせて目をつむる。
シードとカルムも、それを真似した。

……数秒後にそれは解けた。

「私は、”楽しく過ごせますように”って祈ったけど、お兄ちゃん
は？」

「僕は、”平穏な日々が訪れますように”」

「何よそれ……カルムは何をお願いしたの？」

「うーん……恥ずかしいから」

「えゝ教えてよゝ」

二人とずっと一緒にいられますように――

お正月といえば……（後書き）

ギリギリ滑り込み投稿。

最初はいい話にしようと思ったたんなぜかカオスになってしまった。
……なぜだろう。ともかく、明けましておめでとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2419j/>

ある笛使いの旅 短編集（仮）

2010年10月11日21時50分発行